フィンランドの文化と言語

法学部
平尾　節子

フィンランドは別名“Suomi”スオミ（湖の国）と呼ばれる。実に19万湖あるという。私がこの湖の国を訪れたのは、1996年8月フィンランドで開催されたAILA World Conference（国際応用言語学会・世界大会）において研究発表を行うためであった。会場のイヴァスキュラ大学は首都ヘルシンキから列車で約2時間の北方にある。真夏の澄みきった青空の下、キャンパス周辺の緑の樹木に囲まれて点在する限りなく蒼い湖の美しさに目をみはり、感嘆の声を挙げたのであった。まさに森と湖の国の大学であった。語学教育研究の中心的大学であり、日本語教育も盛んである。

「フィンランドと日本は隣国よ」

Dr. Liisa Salo‐Leeが微笑んで握手して下さった時の歓迎の言葉である。フィンランドは大西洋上のアイスランド共和国に次ぐ世界最北端の国であるのに？？？「なぜならフィンランドはロシアの隣に位置し、そのロシアの隣に日本があるから」と言われた。

日本人にとって北欧は、はるか遠い国々とのイメージがある。「日本からヨーロッパは遠い、北欧はもっと遠い」と感じている日本人が多いのでばなかろうか。遠い、近いは、地理上の距離よりも心理的な距離によるところが多い。フィンランド人の親日感情に接して、感動したのであった。

フィンランド語は、言語学的には、日本語と同じウラル・アルタイ語群で、そのうちのフィン・ウゴール語族に属している。語尾が母音で終る点など、日本語との親似が見られる。また、フィンランド人と日本人との国民性の共通点が三つ挙げられると言う。第一にpolite（礼儀正しく）、第二にreserved（内気で）、第三にpunctua1（時間に厳しく）and trusty（信頼できる）と。

Dr. Liisaは、異文化間コミュニケーション学の立場から「アメリカ人のコミユニケーション・パターンがagressive，emphatic，direct，persuasive，talk‐ativeであるのに対して、フィンランドの学生の場合は、defensive，monotonous，indirect，silentで，hesitateする」と述べられた。日本の学生と似ている！！！

フィンランドの歴史的背景からも、その国民性が窺える。1155年からの約600年間は、スエーデン王国の統治下にあり、その後、1809年以降、1917年に独立を獲得するまでの100年間、ロシアからの弾圧と苦難の歴史の故に、フィンランド人は愛国心と自立意識の強い国民である。

フィンランドの誇る文化遺産である、叙事的民族詩カレワラや、シベリウスの交響楽などに、フィンランド人の結束心の昇華をみることができる。日露戦争におけるロシアの敗北は、国民の勇気を大いに鼓舞したという。日本海海戦において、ロシアのバルチック艦隊を壊滅させたAdmiral Togo（東郷元帥）はフィンランド人にとって偉大なる英雄だと聞いて驚いた次第である。

1995年フィンランドは平和への悲願から欧州連合・EUに加盟した。政治・経済的にヨーロッパ間の平和・安全，発展・拡大への協力体制に貢献する中で、特にその教育改革は、ヨーロッパ市民性・語学力の養成、文化遺産・環境保持と開発・経済成長を促進するためフィンランド戦略にとって重要であるとしている。

フィンランドの語学教育政策

フィンランドの公用語は2ケ国語で、フィンラン語とスエーデン語である。19世紀フィンランドはロシア帝国の一部であったため、義務教育において、ロシア語が必修科目であった。1917年独立以来、ロシア語は選択となり、1970年に導入された総合制学技の改革に伴い、フィンランド語と

スエーデン語が必修となった。また、約3分の1の児童が第3の外国語を選択科目として履修する。1989年の語学教育審議会の答申によると、貿易・産業・工業振興の上で、英語とスエーデン語が最重要であり、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語が続く。

フィンランドの外国語教育の現状

総合制学校は9年間の義務教育機関であり、1学年から6学年までがLower Stage，7学年から9学年までUpper Stageである。第1外国語はLower Stageから週2時間履修する。母語以外の英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スエーデン語／フィンランド語の中から1つが選択必修である。ちなみにフィンランド語を母語とする者は94%、スエーデン語は6%である。Upper Stageでは、第1第2外国語が必修であり、第3の外国語を選択履修する。1992年の答申により、総合制学校における必修外国語2ケ国語のうち、1ケ国語は、英語とされた。EU統合に伴い、イタリア語、ギリシャ語も選択科目に加えられた。また、歴史、地理、文学、数学、理科等の科目において外国語を用いて教えることが提唱されている。特に、外国語学習におけるオーラル・コミュニケーション能力の養成が、特に重視されている。教育省は1994年から新しいカリキュラムを導入。英語は、第1外国語として小学校において90%以上の児童が学習している。

フィンランドにおける英語教育の成果

大学生の英語能力の評価資料として、TOEFLスコアの国際比較リストが挙げられる。

TOEFL平均スコアのEU・国際比較
1008－99年データ

オランダ	616	デンマーク	606
ベルギギー	602	オーストリア	596
フィンランド	594	ドイツ	594
ルクセンブルグ	601	スエーデン	589
ノルウエイ	589	ポルトガル	575
チェコ	570	イタリア	551
スペイン	561	ポーランド	559
フランス	556	ギリシヤ	547
日本	496		

ウスペンスキー大聖堂（1868建立）
ヘルシンキ・フィンランド

歴史の都ウィーン

法学部
北嶋　繁雄

（1）その歴史

ウィーンは言うまでもなくオーストリアの首都、ドナウ川のほとりの歴史的都市であり、周知の芸術の都、そして今は観光の都市でもある。

歴史的に説明すれば、オーストリア（Austria, Österreich）という国名はフランク王国のカール大帝が東方のアヴァール人を征服し、Ostmark（東方辺境区）を設置したのが始まりで、その地域が996年ドイツ国王オットーIII世の証書の中で、当時の俗語でOstarrichi（「東方の国」）と表記される。1147年国王コンラートIII世がウィー